

## 夏目漱石著『夢十夜』についての社会科学的アプローチ(1)

著者	佐藤 金吾
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	43
号	3・4
ページ	205-249
発行年	1997-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/5508">http://hdl.handle.net/10114/5508</a>

# 夏目漱石著『夢十夜』についての 社会科学的アプローチ（1）

社会学部 佐 藤 金 吾

## 1. はじめに

文学作品への社会科学的アプローチとして「計量文献学」が有名である。文体の特徴を計量的（主として統計学が用いられる）に捉え、作者に関して不明であったり、疑問が持たれている作品にその答を出そうという学問である。

『夢十夜』の十編の夢の意味解釈を、各夢の構造を計量的に捉えそれに基づいて、行なおうというのがこの小論の目的である。

また、この研究に利用できる他の社会科学的アプローチもあり、それについては次の機会に提示したい。

## 2. 語の使用頻度とそれに関する若干の留意点

個別のそして夢全体の構造を把握するために、語の使用頻度を基にする。（語の使用頻度は文章の内容の要約に過ぎないのではないか、と思われるかもしれない。しかし、その一方で書き手の思いや考えが語の頻度に必ず反映する。もし『夢十夜』が漱石の何らかの意図を持って書かれたならば、必ずその反映が語の使用頻度に表れるのである。）

また、夢の構造のポイントとして次の6点を考える。

(1)主体と副体との関係

(2)舞台となる状況についての時間的・空間的把握

(3)全体におけるカギ語の発見。それが個別の夢の中でどのように展開

しているか。また、それぞれの夢の中でのカギ語の発見。

(4)構造把握の重要な視点として、次のものの使用頻度を取る。

- ・注目語      ・強調や進行状況・結果を示す語      ・否定を示す語
- ・時間・空間の広がりや因果性の深まり（理由を表すことによる）を示す「から」

(5)色彩、明暗を表す語

(6)数詞の使用法

但し、「一心不乱」の様に熟語使用のものは除く。

さて、以下、各夜の文字使用頻度をあげ（頻度の多い順から並べ、また3回以上のものだけを載せる）、それに関連して若干の留意点を示す。

#### 1) 第一夜（使用単語の種類：約270種）

自分（私、あなた）	18（1, 1）	女（私）	12（1）
死ぬ	12	来る	11
上（上がる）	7（3）	見る（見える等）	4（6）
思う	8	云う	8
又	8	日（天道）	7（1）
赤い（唐紅）	6（1）	落ちる	7
待つ	6	出る（出す）	5（1）
貝	6	長い	6

- ・5回：勘定する、下さい、眼、百年、土、黒い  
静かな、大きな、そうして、もう、間  
様に（そうに、風に）

- ・4回：聞く、行く、眺める（覗く）、枕、声  
顔、真珠貝、星、墓、中、程  
うちに、だろう（なかろう）

- ・3回：腕組する、逢う、差す、座る、沈む、掘る、石

夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)

空 (天), 穴, 破片, 東, 西, 白い, 黙って  
丸い, 傍, じゃ, しばらくして, すると, ながら

\* その (此の) 4 (2), 是 (それ) 3 (1)

\* 1. 注目語 :

ます・です (死にます, 死ぬです, 逢いに来ます) 6

来る (逢いに来る, 茎が伸びて来た, 百年はもう来た) 7

から (逢いに来ますから) 2

2. 強調や進行状況・結果を示す語 :

(し) ている 16 に (く) なる 2 てしまう 1

てみる 1

3. 否定を示す語 :

一般否定 (見えない等) 3 特殊否定 (分からない) 1

4. ・それから 4回, だから 0回

・一般形「から」(8回) の内訳 :

時間 1, 空間 (方向・場所) 5 (3, 2), 理由 2

\* 理由の2回が, 1. の注目語としての使用。

5. ・色 (4種類) 赤 (7), 黒 (5), 白 (3), 青 (1)

・明暗語 : 月の光 (2), 日, 星, きらきら (1)

6. 使用数字 :

一 4, 二 2, 百 5

(留意点) :

1. 一般に、『夢十夜』は「待つ」、「死」、「暗い、黒い」に代表される、暗い、消極的なイメージが強調されている。特に、「待つ」という姿勢は、好ましくない否定的なものとして、殆どの研究者に理解されている。しかし、本文に「墓の傍に待っていて下さい。又逢いに来ますから」と二度も記されているように、「待つ」ということは願望達成の最も大切な姿勢として示されている。この故に、第一夜が初めに置かれた「夢」であり、その重要性もここにあるといえる。問題は、待

つ姿勢の中身がどうあるべきかであり、それについて第二夜以下で問われていく。

本小論の基本姿勢はこの見地に立って考察することである。

2. 主体と副体は自分と女である。二人の緊密さの程度はわかりにくい  
が、構造理解には必要ない。女との再会がこの作品の骨格となってい  
ることと、女が一度失われたこと（「死ぬ」が12回）の2点をここ  
で指摘しておく。

3. 第一夜の舞台は2ヶ所。

第1の舞台は室内。しかし、家具をあらわす語が何もない。枕の  
語があるだけで、寝ている女の眼や顔等の身体語が中心で、全部で  
14回。

第2の舞台は庭。主人公は女の墓の傍に座っている。日と月と星  
が中心（10回）。しかしこれらの物は舞台を具体的に示すというよ  
り、時間的経過および方向性を示すものとして使われている。

このようにみると、第一夜では、ある特定の出来事が想定されてい  
ないと考えられる。留意点1で述べたように、第一夜は「待つ」こ  
と及び「苦しむ」ことの意味の確かさ（その結果「女と逢える」）と  
方向性の大枠が示され、待つ姿勢については、第二夜以下で具体的に  
問われていくことが、この舞台設定からもうかがわれる。

4. 否定をあらわす語が非常に少ない点はこの「夢」の大きな特徴であ  
る。特に、他の「夢」と比較する時それが明らかになる。
5. 空間の方向的要素が強いのも、この「夢」の一つの特徴である。特  
に、上指向が強い。使用頻度で見られるように、「上（上がる）」の  
10回に対し、「下（下がる）」は2回である。一般に、上指向は積  
極・肯定的であるが、この点と否定語が少ないことの間につながりが  
あるのかもしれない。
6. 4種類の色、そして日・月・星の光ときらめき。全体的に「闇」  
「死」という暗いイメージの強い『夢十夜』の中で、この第一夜は明

るさと色彩に満ちている。

7. 使用数詞について、一と百が多い点もこの「夢」の特徴である。

百が、願望達成(=女との再会)のある時間と結びついていると考えられる。この「百」を第1番目のカギ語とする。

一は、個(アイデンティティ)の尊厳を示すと同時に、百との関連で、願望達成への正しい踏み出しに結びつくのではないだろうか。

2) 第二夜(使用単語の種類: 約330種類)

悟る(悟り)	9 (1)	様に(な)(そうな)	9 (1)
和尚(坊主, やかん頭)	5 (4)	自分(お前)	6 (2)
出る(出す)	7 (1)	見える(見る)	6 (2)
無	7	部屋(室, 広間, 座敷)	3 (4)
上(上げる)	5 (1)		

・5回: 云う(言う), 侍, 来る, 思う, 頭(やかん頭)

・4回: 座布団, 行燈, 手, 膝, 痛い, 右

そうして, 有る

・3回: 座る, 打つ, 立つ, 噛む(咬む), 時計, 線香

短刀, 鞘, 齒, 身体(身), もの, まで, という

\* その(此の, あの) 3 (1, 1)

\* 1. 注目語:

である(侍である) 3

してやる(悟ってやる等) 3

せねばならない(悟らなければならない等) 2

・下の2つは強い決意を示す。同様なものに、「悟ってみせる」や「生きている訳には行かない」がある(2回)。

刻を打つ(次の刻を打つまでにはきつと悟る,

時計が二つめをチーンと打った) 2

2. 強調や進行状況・結果を示す語:

(し) ている 12 に (く) なる 9 てしまう 2  
てみる 3 てやる 3

3. 否定を示す語：

一般否定 (見えない等) 10 特殊否定 (分からない) 0

4. ・それから 1回, だから 2回

・一般形「から」(4回)の内訳：空間(方向) 4

5. ・色(2種類) 赤(朱)(3), 黒(2)

・明暗語：暗い(2), 明るい(1), 行燈, 夜(1), 光る(1)

6. 使用数字：

一 1, 二 1, 五 1, 九 1

(留意点)：

1. 第一夜で示されている願望達成への確信と方向性が、この第二夜では、まったく存在しない。あるのは、達成しなければならないという異常なまでに強い決意だけである。そのため主人公は何の確かさも持たず、方向性もない暗黒の中で苦しむのである。

2. 主体は自分、副体はなし。悟るための自己との格闘。

ここで注目しなければならないのが和尚の存在と侍。「悟り」が自己の全存在をかけた願望達成の取り組みとしてでなく、和尚(屈辱した相手)や自分の誇りへ向けられたものになっている。人間を目標としているので、何の確かさも方向性もないことが暗示されている。

さて、「自分」を含む「悟り」、「和尚」、「無」という4つの語がほぼ同じ割合で出現している点はこの夢の構造的な特徴の一つである。関心対象が一つでなく、「和尚」→「悟り」→「無」という順に同格的に移っているからであり、さらに、主語としての「自分」の使い方が3回である点は、自己の苦しい状況を語りながらも、自己の閉鎖的世界に閉じ込まない余裕を生み出している。まだ、状況はそれほど深刻ではないのであろう。

3. 第二夜の舞台は寺の一室。

## 夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)

家具や調度品が詳しく記されており（行燈等の引用が21回）、ある特定の出来事を想定してもよさそうである。多くの研究者がこの出来事を漱石自身の円覚寺の体験としている。

また、主人公の暗黒の中での苦難の状況も非常に具体性に富み、この点についても特定の出来事を想定してもよさそうである。

しかし、主人公の「出口がない様な残酷極まる状態」は、漱石が円覚寺で参禅した時の状態をあらわしているか、という吟味が必要であり、この点については4節で改めて考察したい。

4. 否定をあらわす語は多い。先の見えない、確信もない“ないないづくし”の中で、否定形が多くなるのは当然であろう。
5. 「から」の使用法（時間的な広がりを示すものは1回）から見て、物語の展開は限られた時間の中だけと考えられる。もっと言うことが許されれば、過去のある特定の時を暗示しているのではないか。
6. 全体的に暗い感じ。しかし、「闇」という語はなく、明るさも少し残っている。留意点2の最後の所で述べたことと通じている。
7. 特定の数字は強調されていない。ただ、本文最後の「時計が二つ目をチーンと打った」の‘二つ’の重要性については、後で改めて述べることになる。
8. 『夢十夜』を構造的に見ると、重要な時刻が少なくとも3つあるように思える。上に指摘した「時計が二つ目をチーンと打った」時刻をこれからの便宜のため時刻1と呼ぶことにする。

### 3) 第三夜（使用単語の種類：約250種）

自分（御父さん、おれ、お前） 14 (2, 1, 1)

子供（小僧、おれ、お前） 8 (7, 1, 1)

様に（様な）	9 (2)	云う	8	森	7
--------	-------	----	---	---	---

分かる（解る）	5 (2)	声	6	中	6
---------	-------	---	---	---	---

聞く（聞える）	5 (1)	思う（思える）	3 (3)	背中	6
---------	-------	---------	-------	----	---



見る（見える） 3 (3)

・5回：答える，出す（出る），闇，こんな

・4回：背負う，行く，盲目，杉，根，路（道）

左，只，重い，此処（処），ないか（なからう）

・3回：立つ，知る，捨てる，田圃，鷺，晩，丁度，今

不可い，文化五年辰年，少し，何時，じゃ，何

\*その（此の） 3 (5)，それ 1

\* 1. 注目語：

である（自分の子である，そうして盲目である，おれは人殺しであ  
った） 4

くなる（重くなる） 2

知っている（その時初めて分かるのではなく，既に知っていること  
の強調） 3

今（今に重くなる，今から百年前） 3

2. 強調や進行状況・結果を示す語：

（し）している 14 に（く）なる 9 てしまう 3  
てやる 1

3. 否定を示す語：

一般否定（見えない等） 6 特殊否定（分からない） 3

4. ・それから 0回， だから 2回

・一般形「から」（6回）の内訳：

時間 4， 空間（方向） 1， 理由 1

5. ・色（3種類） 青（2），赤（2），黒（1）

・明暗語：闇（5），晩（3），暗い路（1），森の中（1）

6. 使用数字：

一 3， 二 2， 五 3， 六 1， 八 1， 百 2

（留意点）：

1. 構造的に（語の使用頻度から）みると，「自分にくっついている不

夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)

気味なもの（自己の存在と不可分）を分からずにいよう、忘れようとあがくが、結局その正体と直面することになる」といえる。

この正体については、「人間の原罪」とみなす研究者が多い。

留意すべきは、時刻1（ここでは、「鷺が二声鳴く」という形で示される）をきっかけとして急激な展開へ移り、最後に劇的結果を迎える時に至るという構造になっていること。

2. 主体と副体は自分とその子供、すなわち、父と子の関係にある。父と子の関係では、父の方が上位にあるのが普通だ。ところで、本文に「言葉つきは丸で大人である。しかも対等だ」とあるが、語の使用頻度からみると、本当に対等になっている（「自分」を表す語が18回、「子供」を表す語は17回）。そして、最後のところで父子の関係は、実は「殺人者と被害者」の関係であったことが明らかにされる。

この関係変化の合理的説明は、多くの研究者達によっていろいろになされている。

3. 第三夜の舞台は青田の続く田舎道。特別な出来事の後、彼らが進んだ道を進むに従い、暗い森の中へと舞台が移っていく。

この舞台設定については、ある民話の中から取ったとみる意見がある。しかし、平凡に「道は人生を、暗い森は先の見えない苦境」と考えたい。

なお、誰も注意していないが、この舞台設定は同じ民話でも西洋の民話、すなわち、メルヘンとの類似性が高いように思われる。そして、「森の中」についてのメルヘン的解釈は一つの有力なものに思われる。また、第四夜の「河」のメルヘン的解釈も同様。

4. 時刻1以降に「分からない」という語が3度も出てくることから、時刻1の出来事は願望達成の完全な解決ではなかったようだ。
5. 「今」という時間が強調されている。今＝人殺しであったと自覚した時。これを時刻2と呼ぼう。

今から百年前とは時刻1よりずっと以前、とりあえず自意識に始

めて自覚めた時としておこう。

6. 明るい色（青と赤）は時刻1以前のもの。第3夜で初めて登場する「闇」の語は、「子供」から逃げよう（本文では「打ち捨てる」という語が使われている）とするにつれて出現回数が増えてくる。
7. 数字「一」は、「一筋道」「一人の盲目」という形で使われている。第一夜で指摘したように、個（アイデンティティ）の尊厳を示していると考えたい。

4) 第四夜（使用単語の種類：約270種）

爺さん	23	見る（見える等）	11（7）
様に（な）（そうに）	9（2）	出す（出る）	6（3）
手拭	8	云う	7
行く	7	蛇	7
ながら	7	真直	7
中（真中）	5（2）	下（下る）	5（2）
自分	6		

- ・ 5回：吹く， 神さん， 箱， 笛， 上（上る）， 今に  
細い， そうして， 何処， 迄（迄も）
- ・ 4回：聞く， 酒， 息， 柳， 歳， もの， おろう
- ・ 3回：飲む， 思う， 来る， 込む， 置く， 廻る， 歩く  
人， 子供， 手， 腰， 肩， 髭， 顔， 浅黄， 輪  
時（何時）， 大きな， 長い， 間， だろう， ふう

\* その（此の） 3（2）， それ 1

\* 1. 注目語：

になる（今になる， 蛇になる， 真直になる） 4

どこ迄も真直に行く 6

2. 強調や進行状況・結果を示す語：

（し）ている 14 に（く）なる 13 てしまう 1

てやる 2

3. 否定を示す語：

一般否定（見えない等） 6 特殊否定（分からない） 0

4. ・それから 1回, 　だから 0回

・一般形「から」（11回）の内訳：

時間 1, 空間（方向・場所） 6（1, 5）, 理由 4

5. ・色（4種類） 黄色（4）, 白（2）, 赤（1）, 黒（1）

・明暗語：特になし

6. 使用数字：

一 1, 三 1, 四 3

（留意点）：

1. 何の暗さや痛み（それを示す語は皆無）もなく、非常に懐かしく幻想的な「夢」。その意味で第六夜とよく似ている。

この夢は爺さんに象徴されるものへの深い憧憬を表している。ただし、内容的には、爺さん（目指す対象）を見失ったという点を留意すべきである（失意の夢！）。

2. 主体は爺さんで副体は自分。両者の関係はまったくかけ離れていて、自分は爺さんをただ遠くから見ているだけ。この関係も第六夜とよく似ている。

爺さんの特徴は、1) 歳を取っている（古い昔からずうっと続いてきたもの）、2) へその奥で生まれた（人間が作りだしたもの）、3) 色彩に富んでいる（けばけばしいもの）、4) 不可解な力を持つ（手拭を蛇に変える）、5) どこまでも真直に行く（人間の意志から超絶したしろもの）、である。

例えば、芸術とか宗教があてはまりそう。

3. 第四夜の舞台は2ヶ所。

第1の舞台は飯屋で、爺さんが一人で酒を飲んでいる。神さんと  
の会話で爺さんの様子が少し明らかにされる。

一膳飯屋については、『硝子戸の中』二十話に言及がある。

第2の舞台は往来で、爺さんは真直に歩いて行く。途中、子供達に手拭を蛇にして見せようとする場面があり、爺さんの正体がさらに明らかにされる。主人公は蛇を見たいために爺さんの後を何処までもついて行くが、河にぶつかった爺さんはその河に入っていく姿が見えなくなる。

4. 否定を示す語が少ない点は、留意点1で述べたように何の暗さも痛みもないことと関係しているのだろう。
5. 空間的な広がり一爺さんはいそがしく活動している一と、主人公の行動の理由づけ一どうしても蛇が見たいという強い願望一が、物語に変化と活性を生み出している。
6. 「今」という時刻をどう考えるか。

この小論では、第四夜の「今」を漱石が執筆している現在かあるいはそのごく近い将来の時としてとらえ、時刻3と呼ぶ。

なお、この点については第六夜の留意点5を参照されたい。

#### 5) 第五夜（使用単語の種類：約270種）

様に（様な）	7 (5)	大將	10	上（上げる）	9 (1)
自分	9	女	9	馬	8
来る	7	火	7	もの	7
鶏	6	かがり	6		
・ 5回：掛ける、 鳴く、 云う、 見る（見える）					
・ 4回：死ぬ、 飛ぶ、 草、 弓、 腰、 闇、 岩、 足 ひずめ、 太い、 中、 その頃、 迄					
・ 3回：待つ、 出す、 誰、 剣、 敵、 音、 右、 手 藁沓、 前、 という、 下、 生きる					
* その（此の）	8 (5)	是（それ）	1 (2)		

\* 1. 注目語：

夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)

かがり火（暗闇を弾き返す様に火が鳴る，馬はこの明かりを目あて

に闇の中を飛んで来る） 4

天探女（邪魔をしたのは天探女，天探女は自分の敵である） 2

鶏が鳴く（こけこっこうと云う鶏の聲がした等） 2

2. 強調や進行状況・結果を示す語：

（し）している 15      に（く）なる 1      てしまう 1

3. 否定を示す語：

一般否定（見えない等） 11      特殊否定（分からない） 0

4. ・それから 0回，      だから 1回

・一般形「から」（1回）の内訳：空間（方向） 1

5. ・色（2種類） 白（2），黒（1）

・明暗語：火（7），闇（4），焰（1），明るい（1），暗い（1）

夜が明ける（1），夜が更ける（1）

6. 使用数字：

一 3，      二 1，      三 1

（留意点）：

1. 第五夜で注目すべきは、「から」がたった1度しか用いられていないこと。時間・空間の広がり，因果性の深みが非常に弱いということは，第五夜が構造的に「一幅の絵」と見られることをしめす。

もう一つは、「女との再会」を邪魔する対象がはっきり捉えられたこと（天探女として象徴される）。

第五夜を，‘この天探女との対決の決意表明’のための「一幅の絵」（声明文）とみなそうとするのが，この小論の立場である。

2. 主体は自分，副体は女。第一夜との違いは，関係が恋人同士と明示されている点（構造的にはさして重要ではない）と，逢いに来ようとする女が邪魔されて「再会」が出来なかった点である。

なお，使用頻度がより多い「大将」の役割（意味）を考えるとすれば，自分の生死の決定権を持つということから「人に許された生」

となるかもしれない。

3. 第五夜の舞台は2ヶ所。

第1の舞台は敵の陣営で、自分は虜として敵の大將と対決する。  
留意点2で述べたことから、ここで「人生が闘いの場」として表わされているのかもしれない。

第2の舞台は、逢うために馬を急がせる女の場面。この場面設定で大切なのは女の目指すかがり火であろう。注目語で指摘したように「かがり火」は闇を弾き返す力をも持っているのである。

4. 鶏が「こけこっこう」と2度鳴いた。‘2度鳴く（鳴る）’のは、第二夜、第三夜に続いてこれで3度目である（第四夜には「笛が鳴る」という句がある）。

この‘2度鳴く（鳴る）’というのは漱石自身に取って何か決定的な事柄が起こった象徴的な時と考えられる。

なお、この「鳴く（鳴る、打つ）」を第2番目のカギ語とする。

6) 第六夜（使用単語の種類：約300種）

仁王	12	自分	10	云う	9
運慶	8	男	8	様な（に）（そうな）	7（1）
出す（出る）	6（2）			見る（見える）	5（3）
彫る	7	もの	7	思う	7
のみ	7	鎚	6		
・ 5回：まで、方、鼻、門（山門）					
・ 4回：中、若い、眉、木、強い、大きな、上（上がる）					
今（今日）、人（人間）					
・ 3回：出来る、松、行く、より、事、斜に、積む					
掘る、それで、でも、見物（人）、端					
* その（此の、あの） 6（4、2）、是（あれ） 1（1）					

\* 1. 注目語：

夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)

は\*\*\*ものだ(事があるものだ、鼻が出来るものだ、仁王は埋  
まっていないものだ等) 4

思い出す(彫刻とはそんなものかと思い出した等) 2

2. 強調や進行状況・結果を示す語:

(し)ている 22 に(く)なる 2 てしまう 0 てみる 5

3. 否定を示す語:

一般否定(見えない等) 17 特殊否定(分からない) 1

4. ・それから 0回, だから 3回

・一般形「から」(7回)の内訳:

空間(方向・場所) 4 (1, 3) 理由 3

5. ・色(3種類) 赤(朱)(2), 青(1), 緑(1)

・明暗語: 照り合う

6. 使用数字:

一 3, 三 1, 五 1

(留意点):

1. この夢が「芸術の本質」および「明治文化の批判」についての非常にすぐれたエッセイであることは、多くの研究者が指摘するところ。

第六夜を構造的にみると、①今という時の重視(使用頻度4回)、②今における「仁王」の存在意義、③芸術の本質、④運慶を生み出せない今(明治)の文化の実態、

という4つの点が特にあげられる。この4点が庶民の会話として、また自分の手足に則した体験として生き生きと語られていることが、この作品をすぐれたエッセイにしている。

さて、注目すべきは、「確かさ」(芸術の確信と考えられる)がここで始めてはっきりと出てきたことである。それとの関連で「出来る(ない)」という語も登場してくる(頻度3回)。

また、「確かさ」に関連して「思い出す」という語が使われている点もぜひ注目の点。前の夢にある「始めて気づいた」や「解った」



というのとはっきり違って、この「思い出す」の中には、自分（そして漱石自身）がずっと以前に「確かさ」を一度は経験したことが含まれている。

2. 主体は自分で副体は運慶。運慶とはまったくかけ離れた関係で、主人公はただ遠くから見ているだけ。第四夜とよく似ている点はすでに指摘済み。しかし、六夜では、主人公が見ている事から運慶を真似するまでに進む（「てみる」の使用頻度が5回で、今までの最高）。

さて、使用頻度が一番多い「仁王」の意味を考えねばならないが、これについては次の節で行う。

3. 第六夜の舞台は2ヶ所。

第1の舞台は護国寺の山門。仁王を彫っている運慶を眺めながら、人々の会話が続く。自分もその場に居るように読み手を錯覚させるほど、場面描写はすぐれている。

第2の舞台は主人公の家の裏手。確信を取り戻した主人公が、仁王を求めて積まれた薪を片っ端から刻んでいく場面。

4. 内容的にみて否定形の頻度18回は異常に多い（似た第四夜では6回）。しかし、出現場所を調べれば納得がいく。まず、時代とそぐわない運慶、それに関連して否定形が出てくる（6回）。また、明治の木に仁王が見つからないことに関連して、否定形がまとまって出現（5回）。
5. この「夢」のカギを「自分もやろうと促された主人公」としたい。

すると、この主人公の行動性と理由づけに伴って「から」の使用が多くなるし、すでに指摘したように「てみる」の使用も多い。

また、第六夜の「今」は明からに現在、明治の時代。すると似た第四夜の「今」も現在と考えられる。この「今」とカギである「自分もやろうと促された主人公」がどうつながるか、という点から、この小論では『夢十夜』の一つの意味解釈を与える。

7) 第七夜 (使用単語の種類 : 約 260 種)

船	17	行く	14	自分	12
波	8	時 (何時)	8	見せる (見る)	4 (3)
事	6	様に (な, で)	6		

- ・ 5回 : 黒い, けれども
- ・ 4回 : 追う, 来る, 思う, 男, 身 (身体), 日  
 そうして, 只, 上 (上がる)
- ・ 3回 : 分らない, 切る, 乗る, 吐く, 知る  
 出る, 死ぬ, 何処, 何時, 異人, 女  
 海, 足, 水, 一人, 煙, 西, もの  
 色, 星, 高い, 大きな, 方, 向  
 大変, 底, 然し

\* その (此の) 9 (3), それ 3

\* 1. 注目語 :

さへ (死なうとさへ, 船に乗っている事さへ) 2  
 詰まらない (自分は詰まらないから死のうとさえ思っている) 2

2. 強調や進行状況・結果を示す語 :

(し) ている 21 に (く) なる 5 てしまう 4  
 てみる 2

3. 否定を示す語 :

一般否定 (見えない等) 13 特殊否定 (分らない) 3

4. ・それから 0回, だから 1回

・一般形「から」(4回) の内訳 :

空間 (方向・場所) 2 (1, 1) 理由 2

5. ・色 (4種類) 黒 (5), 白 (2), 蒼 (1), 紫 (1)

・明暗語 : 黒い

6. 使用数 :

一 3, 二 2, 七 1

(留意点) :

1. 行く先の知れない「船」が人生を、あるいはひたすら西（西洋）を目指して進んでいく明治という時代を象徴している、ことは多くの研究者が指摘している。

語の使用頻度からみると、「時」という語に注目する必要がある。この夢が人生を象徴しているなら、人生を特徴づける大きなポイントはまさに「時」であろう。物理的に流れる時を、如何に自分の明確な時とし得るか。さて、この夢では「何時」という形で3回、「ある時」という形で2回使われている。いずれも何か不定・不安が伴う「時」であり、人生に対する「確信」を持ち得ない状況が考えられる。

2. 主体は船、副体は自分。自分が主体でない夢はすでに第四夜にあるので2度目となる。自分の意志と無関係に進む点で「爺さん」も「船」も同じだが、船に乗っている自分、それを望まないにもかかわらず乗せられている自分という点は、第四夜と根本的に違う関係である。さらに、第四夜との比較で注目すべきは、2つの夢とも主体と副体の離別が起こる（その意味で2つとも失意の夢）が、第七夜では自分の意志でそれが引き起こされる点。
3. 舞台は船の上。何処に行くかも、その目的が何かもわからない不安な自分に乗せて、船はひたすら進んで行く。

他の乗客の様子。それについて、

- (1) 手すりに寄りかかって泣く女
- (2) 神の存在を説く男
- (3) 歌に熱中する男女

の3つが示される。人間の生き方として、耐え忍ぶこと、神にすがること、好きなことに生きがいを見い出すことが暗示されているようだ。

そのような生き方に同調できなかった自分は、最後に死を決意して海に飛び込む。

4. 行き先に不安を覚え死を決意するという筋から見ると、「から」の使い方が少ない。ここには「生の苦しみからの逃亡」(時間的空間的な広がりや因果的な深まりが伴いやすい)というより、それが持つ理念性を尊ぶという漱石の死に対する考えが反映しているのかも知れない。さらに、この夢には「死は何の解決にもならない」という意味が強く込められている(この点は『硝子戸の中』八参照)。
5. 色調は暗い。特に、「黒い煙を吐いて進む船」といわれるように、黒色は人生の暗さを示す。さらに、死を決意して海の中に飛び込む所以降、黒い色だけが3回も使われるのは、死が決して肯定的には考えられていないことをも示す。
6. 数詞について。「一人の女」「一人の異人」「一人で星を見ている」という形で使われているが、寂しい響きを持っている。個の尊厳は同時に(裏腹に)孤立へとつながりかねない人生の宿命が感じられてならない。

# 8) 第八夜(使用単語の種類: 約 300 種類)

自分(旦那)	15 (1)	見る(見える)	8 (6)
白い男	10	云う	9
商売人(床屋等)	9	女	8
鏡	7	すると	6

- ・ 5回: 出る(出す), 来る, 顔, 頭, はさみ, 格子餅, 金魚, 札, 中, 時(何時)
- ・ 4回: 通る, 眼, 間, 様に(だ), だろう
- ・ 3回: 勘定する, 開く, 眺める, 鳴る, 思う, 数前, 後, 帳場, 声, 手, もの, 百枚  
大きな, まま, けれども, うちに, 方
- \* その(此の) 5 (2), 是(それ) 0

\* 1. 注目語:

物になるか 2

2. 強調や進行状況・結果を示す語：

(し) ている 21 に (く) なる 6 てしまう 1  
てみる 2 てやる 1

3. 否定を示す語：

一般否定（見えない等） 16 特殊否定（分からない） 0

4. ・それから 1回、だから 3回

・一般形「から」（2回）の内訳：

空間（場所） 1、理由 1

5. ・色（4種類） 白（11）、黒（3）、赤（1）、琥珀色（1）

・明暗語：特になし（時は昼間らしい）

6. 使用数字：一 3、二 2、三 1、四 2、五 1

六 1、十 2、百 3

（留意点）：

1. 鏡の中に写っている像に不思議な感慨を持った経験は誰にでもある。

漱石は始め「夢の中」という虚構を用い、さらに突飛な舞台を設定する（夢はそれを自然にする）ことによって、読者に不思議な虚構の世界を提供すると同時に、自身の考えをぼかす一隠そうとしたのではないだろうか。しかし、六夜、七夜ともなると彼の意図がはっきり見えてきて、「夢の中」の虚構だけでは隠しきれなくなった。

そこで新しい虚構の世界を作り出すために、「鏡の世界」という虚構を「夢の中」に持ち込んだのであろう。ついでに言えば、九夜も十夜もこの延長線上にある。

2. 主体は自分、副体はなし。何故副体が白い男ではないのか、という疑問に答えたい。白い男は自分と直接的つながりを持たない、すなわち独立した存在なのである。丁度、時間のように。本文に「白い男は矢張り何も答へずに、ちゃきちゃきとはさみを鳴らし始めた」とある

が、この「ちゃきちゃき」を時を刻む時計の針の音と見たいのである。

すると、店に入った自分と代を払って外に出た自分の間には、ある重要な時の変化があったと推察される。注目語で指摘したように、店に入った時の自分は「物になるかどうか」に迷っていたが（漱石に2度このような時期があった。1度目は多くの研究者が指摘しているように学生時代。2度目は新聞連載を目的とした作家として立っていかれるかどうか不安—正確にはとまどい—であった時期。この不安を克服した記録が『夢十夜』の内容である、と考えるのがこの小論の立場である）、外に出た時の自分は無活動な金魚売り（店に入った時の自分の象徴、だからその時見えなかった）と違った地点にいる。

3. 舞台は床屋。白い男に髪を切ってもらいながら目の前の鏡を通して外の世界（往来）を垣間見る。代を払って外に出ると金魚売がいるが、彼はちっとも動かない。

この夢に関連して、第七夜で紹介した『硝子戸の中』の十六—十七話を思い起こす。そこには「庄さん」や「芸者」も登場し、この話がもとになっているのではないかとつい思わされてしまう。

留意点2で指摘したように、この床屋は漱石が昔の自分を振り返るために用意した舞台であることは間違いないと思われる。鏡の中に昔の自分が走馬燈のように浮かび、その最後にカギとなる「百枚の十円札を数える女」が登場する。

4. 「いつ迄勘定しても、どこ迄行っても尽きる様子がない百枚の十円札」。この百という数字は、願望達成の実現・確かさを象徴している。「帳場の方を振り返ったが、格子の中には女も札も何にも見えなかった」という本文の記述は、第一夜で示された百年はまだ来ていないことを暗示している。しかし女が登場したことは、自分の昔の姿を振り返る中で、何らかの方向性を見いだしたことがうかがわれる。

9) 第九夜（使用単語の種類：約 330 種類）

母 17 子供（子） 9 (4) 父（夫） 6 (3)  
 時（何時） 8 出る（出す） 6 (1) 拝殿 6  
 夜（夜中） 6

- ・ 5 回：聞く， 行く， 上（上げる）， 下（下げる）， 中  
 背中， 様（風な）， となく
- ・ 4 回：来る， 泣く， 暗い， 鈴， 細帯， ながら， 今に
- ・ 3 回：答える， 置く， 付ける， 廻る（ず）， 鳴く（鳴る）  
 祈る（祈り）， 見る（見える）， 草履， 音， 鳥居  
 もの， お百度， 何処， ばかり， そうして

\* その（此の） 6 (4)， それ 3

\* 1. 注目語：

事も（が）ある（答える事もある等） 6  
 今に（今に御帰り， 今に） 3  
 その時（父が出ていく時等） 3

2. 強調や進行状況・結果を示す語：

（し）ている 15 に（く）なる 8 てしまう 2

3. 否定を示す語：

一般否定（見えない等） 9 特殊否定（分からない） 0

4. ・それから 3 回， だから 2 回

・一般形「から」（6 回）の内訳：

時間 1， 空間（場所） 3， 理由 2

5. ・色（2 種類） 黒（1）， ねずみ色（1）

・明暗語：夜中， 闇， 月

6. 使用数字：一 3， 二 1， 三 2 四 2， 八 3，  
 二十 2， 百 3

（留意点）：

1. 父の帰りを今か今かと待つ母子の物語。その最後の所で， この期

待は決して実現しないことと、この話は夢の中で自分の母から聞いたことが告げられる。構造的にみると、(1) 夢の中で夢で聞いた話が語られるという複雑な虚構の設定 (2) 第八夜で鏡の中の一部分としての像であった「百枚の十門札を数える女」が、この夢の中で「御百度を踏む女」として主体(母の使用度は17回)となる、が注目される。

第八夜の留意点4で、'女が登場したことは何らかの方向性を見出したことがうかがわれる'と述べたが、この夢で願望達成の実現は不可能視されたのだろうか。「願望達成は不可能」という恐れは、夢の中で人から聞いた話という2重に不確かな事柄として語られ、'何らかの方向性を見出したこと'はむしろ第八夜以上に確かになった、と解釈するのがこの小論の立場である。

2. 「今に」という語が3回、「今に帰る」という意味で使われている。第四夜の「今になる」という語がここである確信を持って表れたのではないだろうか。第3番目のカギ語として注目したい。

それから、「その時」が3度使われているが、その使われた時にも注目する必要がある。一度目は「父が出ていく時」、二度目は「何時御帰り」との質問に「あっち」と見当はずれの答が帰ってきた時、そして三度目が「周開が真暗なので不安になって泣き出した時」である。

3. この話が『硝子戸の中』に入っていたらもっと自然だったように思う。たまたま(?)『夢十夜』の中に入っていたため、十編全体の中での位置や意味づけを議論されるはめになったのかも知れない。

しかし、少なくともこの夢を書いていた漱石は、自分の昔のことに深い関心を持っていたといえる。

# 10) 第十夜(使用単語の種類: 約300種類)

庄太郎(自分、我) 26 (3) 豚 15



云う	12	女	12
来る	10	見る（見える）	6 (4)
鼻（鼻頭）	5 (3)	行く	7
けれども	6	出る（出す）	4 (2)
パナマ	6	上（上げる）	5 (1)

・ 5回：絶壁， 底， 帽子， 又， 様（そうな）， 事

・ 4回：込む， 落ちる， 健さん， ステッキ， 籠  
鳴らす（鳴く）

・ 3回：持つ， 飛ぶ， 帰る， 思う， 晩， 原  
電車， 草， 水菓子屋， 水菓子， すると  
一匹， 色， すぐ， 七日， 青い， 時

\* その（此の） 6 (5)， 是（それ） 2 (2)

\* 1. 注目語：

パナマ（パナマは健さんのものだろう等） 6

2. 強調や進行状況・結果を示す語：

（し）ている 17 に（く）なる 4 てしまう 2 てみる 3

3. 否定を示す語：

一般否定（見えない等） 11 特殊否定（分からない） 0

4. ・それから 0回， だから 2回

・一般形「から」（5回）の内訳：

時間 1， 空間（方向・場所） 3 (1, 2)， 理由 1

5. ・色（3種類） 青（3）， 黒（1）

・明暗語：夕方， 暁

6. 使用数字：

一 11， 二 1， 六 1， 七 1， 万 1

（留意点）：

1. 「健さんは、庄太郎の話をここまでして、だから余り女を見るのは善くないよと云った。自分も尤もだと思った。」

第十夜は、(1) 第八夜で鏡の中に登場した庄太郎が話の主人公である、(2) 第九夜と同じようにある人が話してくれた物語が夢の中で語られる、という特色をもつ。また、構造的には、はじめと終わりの部分に枠があって、その間に庄太郎の話がサンドイッチされている。

終わりの枠は、(1) 第八夜で指摘したように複雑な虚構で予防線を張る、(2) 「パナマの帽子」がカギとなっていて、願望達成はそう簡単にはいかないが、とりあえず「パナマの帽子」は大丈夫という宣言、の役を果たしているのではないか。

2. 主体は庄太郎、副体は女。庄太郎が若き日の漱石自身の姿であり、結婚して社会に押し出され苦悶するさま（豚は愚鈍な周囲の人々）を表している、との駒尺[1]の説に同意する。それと同時に、この小論では以下の理解に立って『夢十夜』の意味を考えたい。

女は願望の象徴で、十編の中で一番はっきりと捉えられている。その達成のために、豚との尽きることのない格闘が要求される。

さて、豚は何を意味しているのだろうか。「底の見えない絶壁を、逆さになった豚が行列して落ちて行く」。この状況を連想するものとして聖書「マルコによる福音書5章6節—13節」が思い浮かぶ。漱石が聖書をくわしく読んでいたことはいろんな点から確認されていることからみて、第十夜の話が聖書のこの箇所からたぶんに影響を受けていたと考えられる。ところで、聖書の記事は「けがれた霊」が豚に入った結果として書かれている。そこで、豚を各人のもつエゴ（自意識）とみたいのである。

豚を愚鈍な周囲の人々と考えない一つの理由は、豚がその他大勢とされていないで、一匹、一匹とはっきり記されているから。これに関連して、一という数字が11回も使われている点に注目したい。すでに指摘したように、一は個の尊厳を表している。「自己が主で、他は賓である」（『私の個人主義』より）という高い認識に立ったうえでのエゴとの闘いであることも留意しておきたい。

3. 語の使用頻度に関して、「ふらりと帰って来て」というように「何々して」という形が全部で75回も用いられている。この使用法がこの夢をきびきびと、活動的にしている。

### 3. 十編全体の語の使用度から見た特徴づけ

まず、文字使用度数を十編全体について合計したものをあげる（頻度の多い順から並べ、また10回以上のものだけを載せる）。

自分	95	見る（見える、見せる）	88
様（そうに、風な）	77	云う	66
出る（出す）	60	上（上げる）	53
来る	50	行く	48
女	44	思う	42
中	38	もの	34
時	33	子供（子、小僧）	32
人（見物人等）	31	そうして	28
庄太郎	28	聞く	27
大きな	26		

- ・23回：事、爺さん、男、又
- ・22回：すると、まで、でも（それでも、何でも）
- ・21回：鳴く（鳴る、鳴らす）、下（下げる）、ながら、けれども
- ・20回：死ぬ、白い、黒い、顔
- ・18回：立つ、船（舟）、間、方
- ・17回：掛ける、母、今（今に）、鼻（鼻頭）、眼
- ・16回：声、手
- ・15回：長い、豚、只、という
- ・14回：落ちる、何処、前、程
- ・13回：悟る（悟り）、答える、込む、背中、頭、所
- ・12回：赤い、仁王、日（太陽、天道）、空（天、天文学）

夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)

・11回：待つ、分かる（ない）、飛ぶ、聞、父（夫）、腰、だろう  
ばかり

・10回：眺める、乗る、開く、置く、吹く、大将、こんな、音、色  
右、細い、向

\*その（此の、あの）53（33, 3）、是（それ、あれ）7（13, 1）

\*1. 強調や進行状況等を示す語：

ている 167      になる 59      てしまう 17  
てみる 16      てやる 7

2. 否定を示す語：

一般否定 102      特殊否定（分からない） 8

3. ・それから 10, だから 16

・一般形「から」 54

4. 色：白（20）、黒（20）、赤（13）、青（蒼）（8）

黄（4）、朱（3）、緑、紫、琥珀、ねずみ（各1）

5. 使用数字：

一 35, 二 12, 三 6, 四 7, 五 6,  
六 3, 七 2, 八 4, 九 1, 十 2,  
二十 2, 百 13, 万 1

6. 平均総文字数：約540語

若干の留意点をあげる。

1. 「云う」、「聞く」という会話に関係する語の多い点が注目される。  
さらに、「出る（出す）」という積極的な行動を表す動詞が、「来る、  
待つ」といった消極的行動の動詞より使用度が多い点も注目したい。
2. 「ている」という“進行形による行動の強調と独特なリズム感を作  
り出す”語の使用が非常に多い点は『夢十夜』の特徴だろう。また、  
夢のもつあいまいさや唐突さを表現したり和らげたりするために、  
「様な」という語が多く用いられているのも特徴だろう。
3. 「鳴く」という語の使用度の多さは注目してよい。すでに、前節に

においてカギ語として述べてある。

4. 色を表す語（使用度 72）、数字（使用度 94）、および「暗さ」を表す語（暗い、夜、闇、晩、夕方：使用度 39）—以下「暗語」と呼ぶ—を構造上重要な語として取り上げる。
5. 「人」を「第 3 者の存在」—社会性—という重要構造語として用いる。

さて、使用度数が 25 回以上の文字及び上の留意点でもあげた構造上重要な語についてそれらが全体的使用語（どの夢にもほぼ同じ割合で使用されている語）か各個的使用語かを判定するためにカイ二乗検定を行う。

（例）「自分」について：

帰無仮説を「すべての夢に均等に使用されている」とすると、

夜	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	合計
度数	19	6	14	6	9	10	12	15	1	3	95
理想値	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	

より、 $\text{カイ二乗値} = (19-9.5)^2/9.5 + \dots + (3-9.5)^2/9.5 = 30.16$

ところで、自由度 9 のカイ二乗分布の 5% 点は 16.92 だから、 $30.16 > 16.92$  より仮説は捨てられ、従って「自分」は各個的使用語と見なされる。

さらに、データを少しでも活用するために、

- ①それぞれは度数が小さい ②単独では各個的使用語である
- ③まとめることによりカイ二乗値を小さくできる

等という理由から語をあるグループとしてまとめる（表 1 を参照のこと）。

# I. 『夢十夜』の特徴語（全体的使用語）：

- 1) 「様」（使用度 7.7）、「出る」（使用度 6）、「上」（使用度 5.3）、「思

- 夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)
- う」(使用度 4.2), 「中」(使用度 3.8), 「もの」(使用度 3.4), 「そうして」(使用度 2.8), 「大きな」(使用度 2.6)
- 2) 「ている」(使用度 16.7), 「否定語」(使用度 11), 「その」(使用度 5.3), 「から」(使用度 8), 「黒」(使用度 2)
- 3) 「会話語 (云う, 聞く, 尋ねる, 答える, 話す, 問う)」(使用度 11.2)
- 「時関連語 (時, 今, 明治, 百年, 次の刻, その頃等)」(使用度 7.7)
- (注意 1) 先に, 「ている」と「様な」が『夢十夜』の特徴だろうと述べたが, この点は確認されたとみてよい。
- (注意 2) 「云う」, 「聞く」共に全体的使用語であるが, それらをまとめた「会話語」はカイ二乗値がさらに小さいので, 「会話語」を特徴語として選んだ。
- (注意 3) なお, 自由度 9 の 50% 点が 8.34 に注意して, もっと厳格に全体的使用語を決めるなら, 次の 5 つの語となる。
- ・「出る」, 「そうして」, 「大きな」, 「ている」, 「その」

ここで, 特徴語に関連した一つ的话题を紹介する。

『永日小品』の中にある「蛇」は『夢十夜』的な短編である, とよく言われる。これを上でみた特徴語の点から調べてみよう。

・「蛇」の語の使用度:

上 (上げる)	16	中 (真中)	15	叔父さん	13
見る (見える)	13	渦	9	水 (水上)	9
来る	8	雨	8	下 (下げる)	8
様な (そうな)	7	音	6	流れる (流れ)	6

- ・ 5 回: 云う, 動く, 足, 底, 簀
- ・ 4 回: 立つ, 笠, 貴王の森, もの, 二人, まで, 今 (今日), 向
- ・ 3 回: 獲れる, 持つ, 思う, 落ちる, 通る, 時, 手, 腰, 肩

表 1-1 語のカイ二乗値 (1)

夜	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	カイ二乗値
自 分	19	6	14	6	9	10	12	15	1	3	30.16
見 る	10	8	6	18	5	8	7	14	2	10	21.32
様	5	10	11	11	12	8	6	4	5	5	10.92
云 う	8	5	8	7	5	9	1	9	2	12	15.52
出 る	6	8	5	9	3	8	3	5	7	6	6.33
上	10	6	1	5	10	4	4	2	5	6	14.74
来 る	11	5	1	3	7	0	4	5	4	10	22.4
行 く	4	2	4	7	1	3	14	1	5	7	28.25
女	12	0	0	0	9	0	3	8	0	12	56.46
思 う	8	5	6	3	2	7	4	3	1	3	10.86
中	4	1	6	7	4	4	2	5	5	0	11.47
も の	1	3	2	4	7	7	3	3	3	1	11.88
時	2	0	3	3	1	0	8	5	8	3	23.06
子 供	0	0	15	3	0	0	0	1	13	0	94.25
人	0	1	4	3	2	6	9	3	0	3	22.23
そうして	5	4	2	5	1	1	4	1	3	2	8.43
庄 太 郎	0	0	0	0	0	0	0	2	0	26	***
間 く	4	1	6	4	2	0	2	1	5	2	12.63
大 き な	5	1	1	3	2	4	3	3	2	2	5.54
て い る	16	12	14	14	15	22	21	21	15	17	6.47
に な る	2	9	9	13	1	2	5	6	8	4	22.53
否 定 語	4	10	9	6	11	18	16	16	9	11	16.55
一般否定	3	10	6	6	11	17	13	16	9	11	17.41
か ら	12	7	8	12	2	10	5	6	11	7	12.0
物, 心, 物	6	5	8	5	13	12	12	7	10	11	9.54
そ の	4	3	3	3	8	6	9	5	6	6	7.57
色 全 体	16	5	5	8	3	4	9	16	2	4	32.44
白	3	0	0	2	2	0	2	11	0	0	51.0
黒	5	2	1	1	1	0	5	3	1	1	14.0
数字全体	11	4	12	5	5	5	6	15	16	15	22.81
数 字 一	4	1	3	1	3	3	3	3	3	11	20.14
数 字 百	5	0	2	0	0	0	0	3	3	0	23.15

表 1-2 語のカイ二乗値 (2)

夜	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	カイ二乗値
会話語	13	6	19	11	9	10	7	11	10	16	12.46
時間連	7	1	14	8	6	8	8	5	12	6	15.53
生死語	12	6	3	0	8	2	3	0	1	1	38.44
暗 語	0	3	8	1	7	0	2	0	13	5	43.31
啓発語	3	10	11	1	0	5	9	1	0	1	41.68
主体語	18	6	14	23	9	10	17	15	17	26	22.10
今	0	1	3	5	0	4	0	0	4	0	22.41
鳴く	0	3	2	1	7	0	0	3	3	4	19.17

手桶, 草, 泥, 雲, 声, 色, 田, そうして, やがて, ばかり,  
大きな

\* その (此の, あの) 2 (5, 1) 是 (それ) 2 (3)

\* 1. 強調や進行状況等を示す語:

ている 15 になる 3 てしまう 1

2. 否定を示す語:

一般否定 6 特殊否定 (分からない) 3

3. ・それから 1, だから 0

・一般形「から」 16

4. 色: 黒 (4), 青 (蒼) (2)

5. 使用数字:

一 4, 二 4, 三 2, 四 1

6. 総文字数: 約 580 語

「蛇」が『夢十夜』の特徴語を備えているかをカイ二乗検定で調べてみる。



	から	様	出る	上	思う	中	もの	そうして	大きな
『夢十夜』	8	7.7	6	5.3	4.2	3.8	3.4	2.8	2.6
蛇	17	7	2	16	3	15	4	3	3

	ている	否定	その	黒	会話語	時間連
	16.7	11	5.3	2	11.2	7.7
	15	9	2	4	9	7

総文字数が一致するように「蛇」の度数を変更して（例えば、「から」の度数 17 は  $17 \times 540 / 580 = 15.83$  となる）から計算して、

$$\begin{aligned} \text{カイ二乗値} &= (15.83 - 8)^2 / 8 + (6.52 - 7.7)^2 / 7.7 + \dots \\ &\quad + (6.52 - 7.7)^2 / 7.7 \\ &= 61.46 \end{aligned}$$

ところで、自由度 14 の 5% 点は 23.69 だから、このままでは「蛇」が『夢十夜』の特徴語を備えているとはいえない。そこで、例えばカイ二乗値が大きかった「否定」と「上」を除き、さらに「中」（「中」の多少で『夢十夜』の特徴が決まるとは思えない）を除けば、カイ二乗値は 16.27 となり、自由度 11 の 5% 点が 19.68 だから  $16.27 < 19.68$  より「蛇」が『夢十夜』の特徴語を備えているといえる。

もし、上の注意 3 で述べたように『夢十夜』の特徴語を、

「出る」、「そうして」、「大きな」、「でいる」、「その」

の 5 つに限定するなら、この時のカイ二乗値は 5.55 となり、自由度 4 の 5% 点は 9.49 だから、非常にすっきりした形で「蛇」が『夢十夜』の特徴語を備えているといえる。

## II. 『夢十夜』の各個的使用語：

- 1) 自分、見る、来る、行く、女、子供、人
- 2) になる、一般否定語、色全体、白、数字全体、百
- 3) 「生死語」（死ぬ、生きる、命、殺す、自刃する）、「暗語」、「啓発語」（分かる、解る、悟、気が付く、思い出す）、今（今日）、鳴

夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)  
く (鳴る, 鳴らず, 刻を打つ)

さて, この 18 語の間に強い相関があるものを調べると,

- (1) 「自分」と「色全体」に正の相関 (相関係数: 0.76)
- (2) 「見る」と「暗語」に負の相関 (相関係数: -0.72)
- (3) 「来る」と「女」に正の相関 (相関係数: 0.88)
- (4) 「来る」と「今」に負の相関 (相関係数: -0.70)
- (5) 「女」と「今」に負の相関 (相関係数: -0.77)
- (6) 「子供」と「暗語」に正の相関 (相関係数: 0.74)
- (7) 「色全体」と「白」に正の相関 (相関係数: 0.78)
- (8) 「数字全体」と「百」の間には相関がない。もし第十夜を除けば,  
相関係数 0.81 という強い正の相関がある

となる。この点について若干の留意点を記す。

1. 「暗ければ, 見る行為は少なくなる」という以上に, 「見る」という行為に「暗さ」から出ようとする積極的な意味があるのではないか。  
そこで, 「見る」だけに限定した使用度について調べると, 「暗語」との相関係数は -0.52 となって, 弱い負の相関がある。
2. 「女が必ず来る」という第一夜の大枠が, 十遍の夢全体に貫かれているとみてよい。
3. 「女と今」の間に負の相関があることは, (2)と(3)の関係から当然出てくるが, 「今」の時が「願望の成就 (女との再会)」でないこととしてみてよい。
4. 「子供と暗語」の間に正の相関があることは, 漱石自身の不幸な子供時代のことが反映しているのかも知れない。

以上の相関に注意して, 次の 14 個の独立な語:

- 1) 自分, 行く, 女, 人
- 2) になる, 一般否定語, 白, 数字全体, 百

### 3) 生死語, 暗語, 啓発語, 今, 鳴く

を用いて、十遍の夢の構造（つながり具合）を数量化第2類により調べる。

まず、次の14個の項目を取りあげる。

- ①主体は「自分」 ①「行く」の使用度が平均値以上
- ②副体が「女」 ③「第3者の存在」が著明
- ④「になる」の使用度が平均値以上
- ⑤一般否定語の使用度が平均値以上 ⑥「白」の使用度が2以上
- ⑦「数字」の使用度が平均値以上 ⑧「百」の使用度が2以上
- ⑨「生死語」の使用度が平均値以上 ⑩「暗さ」が著明
- ⑪「啓発語」の使用度が3以上 ⑫「今」の使用度が平均値以上
- ⑬「鳴く」の使用度が平均値以上

（注意1） 語については'使用度が平均値以上'という基準が適切であるが、使用度が小さく、また飛び抜けて大きな使用度を持つものがあると、平均値は必ずしも適切な基準ではなくなる。

（注意2）「第3者の存在」及び「暗さ」が著明とは、「人」及び「暗語」の使用度が平均値以上か、またその平均値に近くかつ第八夜や第二夜のようにその状況から明らかであるもの。

各夜に対して、それぞれの項目ごとに「Yes」なら○印を、「No」なら×印をつけると、次の表が得られる。

（注意3） 項目①と項目①'は○×が丁度正反対になるので、内容がダブルため項目①'は省略する、このことは、「自分」でない主体（第四夜の爺さん、第七夜の船、第九夜の母、及び第十夜の庄太郎）がどんどん「進んで行く」ことを示している。

夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)

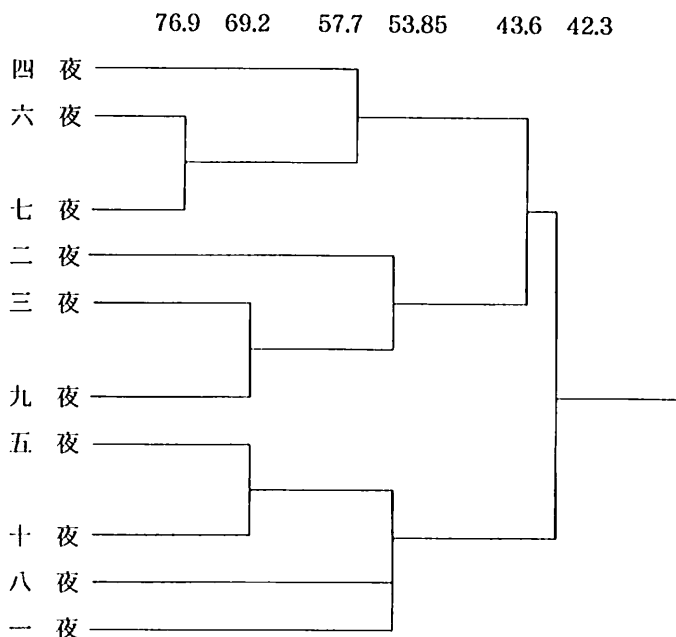
	項目	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
一 夜	○	○	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×
二 夜	○	×	×	○	×	×	×	×	○	○	○	×	○
三 夜	○	×	○	○	×	×	○	○	×	○	○	○	×
四 夜	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	○	×
五 夜	○	○	×	×	○	○	×	×	○	○	×	×	○
六 夜	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	○	○	×
七 夜	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	○	×	×
八 夜	○	×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○
九 夜	×	×	×	○	×	×	○	○	×	○	×	○	○
十 夜	×	○	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	○

さて、2つの夜同士の類似性を計算する。例えば、一夜と二夜は13項目のうち5項目が一致しているから、類似性は  $5/13=38.5$  (%) となる。

類似性を計算して次の表が得られる。

	二夜	三夜	四夜	五夜	六夜	七夜	八夜	九夜	十夜
一 夜	38.5	38.5	46.2	61.5	30.8	38.5	53.8	38.5	46.2
二 夜		53.8	46.2	61.5	46.2	38.5	38.5	53.8	46.2
三 夜			46.2	15.4	61.5	38.5	53.8	69.2	30.8
四 夜				38.5	53.8	61.5	46.2	61.5	38.5
五 夜					38.5	46.2	46.2	30.8	69.2
六 夜						76.9	46.2	30.8	38.5
七 夜							53.8	23.1	46.2
八 夜								53.8	46.2
九 夜									61.5

一番類似性の高いもの同士をまとめていく（その計算結果は5.補足にまとめてある）と、次の構造図が得られる。



[考察] :

- (1) 十編は「一一八一五一十夜」と「二一三一九一四一六一七夜」の2つのグループに大別される。前者のグループに共通する性質が、啓発語の使用度が1回以下でかつ「今」の使用度も1回以下である。

従って、この分類のポイントは「啓発感」と「今の時感覚」であると考えられる。前者はそれが両方とも弱いのである。

- (2) (1) であげた後者のグループは「二一三一九夜」と「四一六一七夜」の2つに分けられる。各グループに共通し、かつ2つのグループ間で○×が異なるものに「暗語」の使用度がある。また、暗語のような完全な分類ではないが、「第3者の存在」の著明さが「四一六一七夜」にあり、「になる」の語の使用法から考えられる「一生懸命何かしなければ」という切迫感が「二一三一九夜」には

ある。

- (3) 二夜と「三一九夜」を分けるポイントは「百」と「今の時感覚」である。また、四夜と「六一七夜」を分けるポイントは「啓発感」と「否定語の使用度」と考えられる。
- (4) (1) であげた前者のグループについて。まず、一夜と八夜が孤立した特別なものであることがわかる。次に、「五一十夜」について八夜との違いの明確化の点からその共通性を考えてみる。「副体が女」であるのに「願望の達成に関連する百」の使用がゼロであり、八夜はこの関係が丁度逆になっている。また、夢の内容に関係することだが、両者とも「絶壁からの墜落」があり、墜落に関係した要因として「エゴ」の問題、すなわち人間の内面の暗さがある。これは八夜にはないものである。

#### 4. 『夢十夜』の意味解釈

今までに準備してきたこと、また部分的に述べてきたことをここでまとめ。その中で3節で得られた構造の解釈も考えたい。

第一夜は十編の夢の縁どりー「待つ」ことの意味及び「願望達成」の確かさと方向性の大枠を示す。意味の確かさがどのように啓発され、方向性がどのように獲得されていったかは第二夜以下で具体的に問われるのであるが、「女が必ず来る（願望の成就）」という第一夜の大枠が十編全体に貫かれていることを注意しておきたい（3節の相関関係に関する留意点2で確認済み）。

第二夜は第一の啓発を示す。主人公の「出口がない様な残酷極まる状態」についてどの時期かの吟味が必要であると2節の留意点で述べたが、漱石がこのような状況にあった時期の一つとして漱石のイギリス留学前が考えられる。『私の個人主義』から少し引用したい。

「とにかく3年勉強して、ついに文学は解らずじまいだったのです。私の煩悶は第一ここに根ざしていたと申し上げて差支ないでしょ

う。一中略—私はこの世に生まれた以上何かしなければならん、といって何をして好いか少しも見当が付かない。私はちょうど霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦んでしまったのです。そうしてどこからか一筋の日光が射して来ないか知らんという希望よりも、此方から探照燈を用いてたった一条で好いから先まで明らかに見たいという気がしました。一中略— 私は私の手にただ1本の錐さえあればどこか一カ所突き破って見せるのだからと、焦燥り抜いたのですが、あいにくその錐は人から与えられる事もなく、また自分で発見するわけにも行かず、ただ腹の底ではこの先自分はどうなるだろうと思って、人知れず陰鬱な日を送ったのであります。一中略—。

私はこの自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。一中略— その時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもって陰鬱なロンドンを眺めたのです。比喻で申すと、私は多年の間おう悩した結果ようやく自分の鶴嘴をがちりと鉦脈に掘り当てたような気がしたのです。』

第二夜の中で、「趙州曰く、無と。無とは何だ」というところなど、「ある文学者こう言う。文学とは何だ」という漱石のイギリス留学中の苦悶がほうふつされる。最後の「はっと思った。右の手をすぐ短刀に掛けた。時計が二つ目をチーンと打った」について考えたい。漱石のイギリス留学は2年間であり、'二つ'を2年間であった留学の象徴とみれば、この文章は漱石がしっかりと自己本位を手に握ったと読むことができる。

学問的にとらえた自己本位ということは、当然生き方の問題として次に出てくる。それはまた漱石の若い頃からの真剣な問題でもあった。

さて、この自己本位という立脚地の発見（啓発）、すなわち個性の発展の絶対性は人間にとってその人生にバラ色の未来を約束するのか。それを必ずしも明るい未来としてでなく、むしろ悲劇としてとらえた人が漱石その人であり、それが三夜の問題であった。

道を歩む者―旅人の姿は、きまって人生を象徴する。楽しさ、苦勞、悩み等をかかえ、それに一喜一憂しながら長い道のりをとぼとぼ歩むのが人生なのだろう。妬み、貪欲、そして際限ない自己主張などに苦しみ、自己をまじめに振り返って反省するとき、誰でも自分自身の内部に巣くっている気味悪い何かにびっくりさせられる。漱石は「自己の心のある部分に人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでいる」という言葉を使っているが、私達人間を自己中心的にさせているエゴイズムの存在である。第三夜は、この結核性の恐ろしいものを背にしょって人生を歩む漱石自身（それは同時にすべての人間）をとりあげている。日光の差さない洞窟の奥に住む生物の目が見えないように、盲目の小僧は人の内部の奥深くに巣くっているものを示しているのではないか。

真ん中頃の「すると鷺が果して2度鳴いた」からいよいよ物語は核心に入る。‘2度鳴く’がカギ語であることはすでに第五夜の留意点で指摘してある。鳥が鳴くといえは、聖書の「マルコによる福音書」14章70―72節の‘鶏が3度鳴く’記事が研究者によって指摘されている。聖書の記事には自分の生命を救おうとして主イエスを見捨てるペテロが描かれているが、自己中心的にふるまうペテロ、そのエゴイズムの恐ろしさ・悲劇―漱石自身が自分の体験を通して徹底的に自覚した―の象徴として、漱石は鳥の鳴き声を『夢十夜』の中で非常に効果的に使っているのではないか。

さて、誰にでもその人生の中で‘鷺が鳴く’ときがある。そのとき人はどうすべきか、これが第三夜の問題であり、漱石にとってこれは決してひと事ではない真剣な問題だった。二夜との関連でいえば、この問題が解決しなければ本当の自己本位を握ったことにはならないのである。

本文では2つの分かれ道の選択が迫られる。エゴイズムの恐怖からひたすら逃げ回る道と、エゴイズムに正面から立ち向かう道との選択が。主人公かつての漱石と見たい―は前者の道、エゴイズムに恐怖しながら何の手だてもなくただそれに振り回される人生の歩みを選ぶ。そ



して、その道は進めば進むほど暗くなる。

最後の言葉「背中の子が急に石地藏の様に重くなった」という箇所は、多くの研究者にキリスト教的原罪意識としてとらえられている。しかし、そんな抽象的でない、もっと具体的なものが漱石にはあったのではないか。例えば、ようやくたどり着いた杉の根はエゴイズムの恐怖の根源であるが、その根源は自己の抹殺にあった、自分を生かそうとするエゴイズムが実は本来の自己を抹殺してしまった、そしてそこにエゴイズムの悲劇が根ざしているという、漱石の深い洞察であったのではないか。

さて、第三夜には「今」が強調されるという別の面があり、この点から第四夜以降へとつながっていく。「今になる」は‘ばくぜんとした近い将来そうなるだろう’ではなく、すでに〔考察〕の中でも指摘したように「一生懸命何かしなければ」という切迫感に強く結びついているのである。「今」をどうとらえるかで『夢十夜』の意味解釈が変わってしまうが、この小論では、すでに2節の八夜の留意点で述べたように、新聞連載を目的とした作家として立っていけるかどうかの不安（正確にはとまどい）をもつ漱石の「今」としてとらえる。

明治における新聞界、新聞に連載されている小説への一般の人々の認識等が最近の研究で明らかにされている（〔2〕参照）。その状況の中でどんな小説を書いていったらよいか、その苦悩が『坑夫』の中に見られると思う。結論を急げば、その深刻な問題への漱石の対処方法がこの『夢十夜』に表れ、この不安（とまどい）を克服した記録が『夢十夜』の内容であるといえる。

漱石はまず芸術（小説）の本質を考察し—それはいかなる時代であれ、どのような状況でも変わらないもの—、その本質に対し自分が具体的に何を書けばよいかを自問したのではないか。その結論として、かつて自分がイギリス留学時に獲得した自己本位に立つことであり、人におもねったり、他者の思惑を気にするのではなく自己に忠実に従うことを最

優先することであった。だから、『夢十夜』の内容は芸術に関する事柄と自己の最大関心事—エゴイズム—なのである。そして、ここで明らかにされた事柄は、『三四郎』以降の本格的な小説の主題となっていく。

第四夜は芸術の本質論であり、同時に置かれた自分の場でそれを発揮出来ていない者の不安な姿を表している。2節の留意点でも述べたことだが、爺さんは人間が生み出したものだが、人間の意志から超絶したしろもの。本人が遠くから眺めているだけでは、芸術は手拭いを蛇（人生を主体的な生き方）には絶対変えない。たとえ前途に明かりが見えなくても自分がその問題に直接関わっていかざるを得ないということを暗示するように、「今になる」—近い将来そうならざるを得ないという言葉で第四夜は終わる。

第五夜は「願望の達成」を邪魔するものへの激しい怒り、それに正面からぶつかろうと決意する漱石の姿勢が示される。2節の留意点で指摘したように、その対象ははっきりとらえられている（天探女として象徴される）。特に、注目すべき点は第三夜では自己の問題としてのエゴイズムであったが、この夢ではすべての者にあてはまる客観的对象としてとらえられていること。だから自分だけの問題から離れて、人間すべてにあてはまり、誰もがぶつかっていかなければならない問題となっている。

一つだけつけ加えたい点がある。主人公（自分）は女が淵へ転落したのをどうして知ったのか。文脈から知らないはずであるが、すると最後の「自分の敵である」の‘自分’は誰か。思うに、ここに作者漱石の思いが小説の枠を飛び出して表れてしまったのだろう。

第六夜が芸術の本質に関する優れたエッセイであることは指摘済み。しかし、この美しい夢物語にもエゴイズムの問題が関わっている。竹内均著『大陸移動説』（NHK ブックス）に、「仏教の教えによると世界は巨大な象に支えられ、あまのじゃくと称する怪獣にのっかっているという。あまのじゃくが動けば、世界も動くわけである」との一文がある。

また『広辞苑』によれば、「あまのじゃく＝仁王の像がふまえている小鬼」とある。第五夜のあまのじゃくをこれに結び付ければ、第六夜には次のような見方が考えられる。「現代ではエゴイズムを制御できる（押さえ付ける仁王が象徴する）ものがいないし、またそのことの重要性を誰も注目しなくなった。気がついた自分（第2の啓発）もそれを見つけれないでいる」と。

さらに、「願望達成」を「本来の自己とは何か。それを生かす道は何か」という、晩年の漱石が追求した課題と考えるなら、第六夜は次のようにも言えるのではないか。「学び、訓練し、そして絶え間なく努力して自己を見い出す作業は彫刻にたとえることができる。六夜流に言うところ、私たちの自己確立の方法は木の中に埋まっている本来の自分を掘り出すことであり、そうやってやってみたら現代の私たちには本来の自分なんていうのは埋まっていないのだと悟った」と。

いずれにしても、「願望達成」への方向性と「今の不安」に対する対処方法が漱石にとってはっきりしてきたといえる。

第七夜は人生の目的は何かを問うものである。すでに2節の留意点でも述べたように、人生の生き方として、耐え忍ぶこと、神にすがること、好きなことに生きがいを見い出すことが暗示されている。この点に関連して、小説『行人』の中で、近代的個人主義者の主人公の悲痛な言葉として「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか、僕の前途にはこの3つのものしかない」があげられている。

ところで十編全体の中での意味は何か。六夜までに見い出された方向性をさまざまな人生の織りなす社会の場で、それもぎりぎりの死の状況にまで追い込んで「安易な逃避の道をとるべきでない」という確認作業がこの夢の意味であろう。3節の構造図で六夜と七夜が同じワクでくくられているのは「第2の啓発」の確認とその実行に踏み出す決意の表明という共通性、およびすでに指摘したように「一生懸命何かしなければという切迫感」の共有があるからである。

第八夜から第十夜において、いままでの方向性がもう一度再確認される。それが、3節の構造図で一夜と八夜、三夜と九夜、そして五夜と十夜が同じワクにくくられる理由である。

第八夜は、第一夜が果たしていると同じ役目、「願望達成」の確かさと方向性の大枠が自分の過去を振り返る中で確認される。「物になるかどうか」不安であった者が、時間の経過を静かに待つ中で女（願望達成）を捉える。確かに捉えたわけではないが、確かさと方向性については金魚売りとの対比で明らかにされる。

悲劇の根源は「本来の自分」が殺されることにあるのを示す点で、第九夜は第三夜と相通じるし、願望達成の確かさを示す「百」が「今の時点で絶望」的である点でも共通性をもつ。子供を背に負う父と母の対称、一方は人間の原罪的悲劇で他方は人間の現実の宿命的悲劇、さらに両方とも完全な解決はありえない問題。その中で一生懸命生きる姿が示される。そして次の十夜へとつながっていく。

すでに2節の留意点で示したように、第十夜はエゴとの闘いの決意表明であり、第五夜と同じ内容をもつ。構造図の〔考察〕で指摘したことだが、「啓発と今の時感覚」が弱いということは、すでに啓発の時は終わり、また今の時点でたとえ願望達成が絶望と解っていようと、実行あるのみという段階にきていることを示す。

第十夜は最後のシメの意味をもつ。今まで抽象的に捉えられていたエゴイズムの問題が作者自身の生の問題としてまっ正面から捉えられている。漱石がまとまった原稿料を手にして始めて買った品物がたしかパナマの帽子だったという事から、パナマの帽子は漱石にとって文筆活動を表す。パナマの帽子をかぶったまま主人公は豚（エゴ）と雄々しく闘うのであり、新聞連載を目的とした作家として立っていけるかどうかの不安は完全に克服されているのである。

## 5. 補足（構造表の作成）

1) 一番類似性の高い六夜と七夜をまずペアにする。すると、

	二夜	三夜	四夜	五夜	六一七夜	八夜	九夜	十夜
一 夜	38.5	38.5	46.2	61.5	34.6	53.8	38.5	46.2
二 夜		53.8	46.2	61.5	42.3	38.5	53.8	46.2
三 夜			46.2	15.4	50.0	53.8	<u>69.2</u>	30.8
四 夜				38.5	57.7	46.2	61.5	38.5
五 夜					42.3	46.2	30.8	<u>69.2</u>
六一七夜						50.0	26.9	42.3
八 夜							53.8	46.2
九 夜								61.5

を得る。例えば一夜と六一七夜の類似性は  $(30.8 + 38.5)/2 = 34.6$  となる。

\* アンダーラインを引いた数値は一番類似性の高いものを示す。

2) この新しく得られた表で一番類似性の高い2つのものに、上でやったと同じ処理を行えば、次の表が得られる。

	二夜	三一九夜	四夜	五一十夜	六一七夜	八夜
一 夜	38.5	38.5	46.2	53.8	34.6	53.8
二 夜		53.8	46.2	53.8	42.3	38.5
三一九夜			53.8	34.6	38.5	53.8
四 夜				38.5	<u>57.7</u>	46.2
五一十夜					42.3	46.2
六一七夜						50.0

3) 同様にして、

	二夜	三一九夜	四一六一七夜	五一十夜	八夜
一 夜	38.5	38.5	38.5	<u>53.8</u>	<u>53.8</u>
二 夜		<u>53.8</u>	43.6	<u>53.8</u>	38.5
三一九夜			43.6	34.6	<u>53.8</u>
四一六一七夜				41.0	48.7
五一十夜					46.2

夏目漱石『夢十夜』についての社会科学的アプローチ (1)

\* 二夜と四一六一九夜の類似性は  $(46.2 + 42.3 \times 2) / 3 = 43.6$  となる。

4)

	二夜	三一九夜	四一六一九夜
一一八一五十一夜	46.2	40.4	42.3
二 夜		<u>53.8</u>	43.6
三一九夜			43.6

5)

	二一三一九夜	四一六一九夜
一一八一五十一夜	42.3	42.3
二一三一九夜		<u>43.6</u>

6) 最後に,

	二一三一九一四一六一九夜
一一八一五十一夜	42.3

## 6. 参考文献

- [1] 駒尺喜美著『漱石 その自己本位と連帯と』八木書店（昭和 45 年）
- [2] 有山輝雄「明治末期の新聞メディアと漱石」, 漱石研究第 5 号